



### 飛距離が自慢の幼稚園 スコアにこだわる小学生、 マナーに厳しい高校生、 歴史がわかって大学生、 友、群れ集う卒業式。

これは、欧米のゴルフ史や逸話を題材にした小説やエッセイで日本に「読むゴルフ」を紹介した作家、夏坂健氏が『ゴルフへの恋文』（新潮社刊）という作品に記した文章だ。ゴルフ好きならその洒落な皮肉に共感を覚えると思うが、今回の匠は心が震えるような衝撃を受けたという。それもすべてはタイミングだ。響くべき時に響けることが人生の機微となり、新しい扉を開ける鍵になる。

### クラブ3本から始まった ゴルフ人生

1986年、日本初のゴルフ専門旅行代理店として創業したジェットアンドスポーツは、29年後の今日、4大メジャー観戦や世界ゴルフ紀行と銘打った100万円を超える海外ツアーから国内ラウンドまで、多岐に渡るゴルフ旅を提供する会社に成長した。

その代表取締役の島津隆司は、今年66歳の1949年生まれ。昨今話題の『2015年問題』の中心にいる団塊の世代だ。彼の物語は、立教大学卒業後、故郷の北海道に戻るところから始まる。

で、正義や平和を求めて青春の火が燃え上がり、そして無力感からシラケた雰囲気が世代を覆っていました。そんな時に父親から地元に戻って来な就職先があると聞かされて、田舎に帰ってリハビリも良いかなと

新卒入社を果たしたのは、函館郊外に新設されたスキー&ゴルフリゾート会社。そこで元プロゴルファーの上司に、ほぼ毎日のようにラウンドに連れ出される。上司に許されたクラブは5番アイアンとウェッジ、パターの3本だけ。それが島津とゴルフの出会いだ。

業務面では、入社翌年にホテルの支配人を任される。全国から訪れる観光客や一度に400名が押し寄せ修学旅行生を先頭に立つてさばく仕事が続いた。また、自分の月給より高い航空運賃を払ってでも北海道でゴルフをしたい人々の気持ちも知ることになる。入社8年後、異動の命を受け東京のグループ会社へ。「東京勤務はつらかったですよ。それまでは支配人として全体を見渡す仕事が多かったのに、自分が何をしているのか曖昧な業務を繰り返すというのがね。なぜ北海道で頑張れたかというのと、どんなにキツくても楽しんでくれたお客様は必ず『ありがとう』と言って下さる。その言葉が自分の支えだったんだと」

都会で腐りかけていた島津のオフィスにある日電話が入る。かけてきたのは、リゾート時代に彼の下へ何度も遊びに来た僕らしい客だった。「電卓を叩く音だけが響くフロアで、

## 世界の本物を紹介する それが自分の使命

### Topics Of His Work I



### パンフ製作で始めたカメラは実益or趣味?

クオリティの高いパンフレット製作を行うため、自分で撮った写真を使う手法は創業から今も変わっていない。所有のカメラはボディだけで6種。ダンロップフェニックスでの“作品”はフェニックススカントリークラブに常時展示されているという。

島津の会社員時代から協力し、創立メンバーにもなった木戸啓子専務。「カメラのことで気をつけて下さいね(笑)」



僕一人『今の北海道の芝は』なんて話すんですよ。困った状況でしたが、お客様の頼みは断れませんが、それで函館の、後に独立を共にする後輩を通じて元のリゾートにお客様を送っていました。やがてそれが目立つようになり、上司のひとりで総務部観光課ができた。初年度のスキーツアー客が600人。ゴルフは550人だったかなあ」

上がった。それから4年を経ていよいよ独立を迎える。しかし島津は、自分の会社をもつことに強い憧れや意志があったわけではなかった。「代理店を辞める時も、そろそろだ」と社長に背中を押されたくらいです。ここまでの経緯にしたって古いお客様の依頼にこたえてきただけなんです。会社を興してからは故郷の北海道から九州、沖縄、さらにグアム、サイパン、ハワイと企画の範囲を広げていきましたが、すべてお客様のリクエストに応じた形です。そのうちに世の中パブルで浮かれ始めて、'90年代初めまではウチの業績もうなぎ登り。でもね、力だけの時代は終わるんです。そしてあらゆる価値が変わりました」

# 匠タクミの言 カクゲン

ゴルファーのために活躍するゴルフ界の匠から  
それぞれの仕事に賭けた誇り高き言葉をいただく連載企画。  
第6回はゴルフ専門旅行代理店の代表が登場。

写真◎六本木泰彦 文◎田村十七男  
撮影協力◎ジェットアンドスポーツ 03-3535-5111  
<http://www.jetgolf.co.jp/>

ジェット アンド スポーツ 代表取締役  
**島津隆司**  
Takashi Shimazu

2015 May



パー3コンテストのほほ笑ましきも  
ゴルフの素晴らしさです

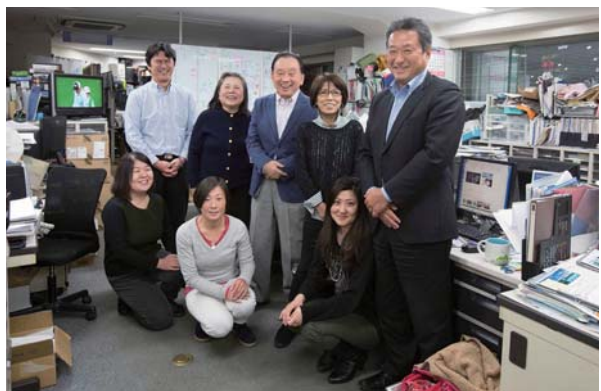


メジャー大会の記念品で溢れる応接室。マスターズは2000年大会から15年分のグッズが並ぶ。



昨年のマスターズ、パー3コンテストで島津が撮影したルーク・ドナルドとその家族。「揃いのツナギの子供達がかわいいでしょ?」。

Topics Of His Work 2



ジェットアンドスポーツは  
社員添乗員が生命線

現在11名が従事するジェットアンドスポーツ。外部委託も珍しくない旅行業において、島津は社内で育成した添乗員の同行こそサービスの原点であり、自社の生命線だという。2020年東京オリンピックに向かって、欧米国からの訪日ゴルフの旅への案内も始まった。日本ゴルフジャーナリスト協会の法人会員でもある。



「たそうだ。国内男子ツアーのダンロップフェニックスでは、プロカメランと同じピンスを纏いシャッターを切っている。これは、26年にわたってトーナメントの観戦ツアーを実施してきたフェニックスカントリークラブとの縁だという。」  
「今一番のお勧めはハワイ、カリブ、地中海などへのクルーズゴルフです。豪華客船による憧れのクルーズライフを楽しみながら、寄港地の名コースをラウンドするもので、ゴルフをされないご家族も同伴OK。まさに夢のゴルフ旅行ですね。個人的な夢は、マスターズのサンデーバックナインを撮影することかな」

その発言にはさすがに驚いた。USツアーのフォトグラファー申請は非常に厳しく、ましてやメジャー大会ともなれば限られた者にしか撮影許可が下りない。もちろん島津もそれを知っている。  
「他では見られない本戦の様子を同行してお客様に披露できたら最高のサービスになるんじゃないですか。そう、昨年のパー3コンテストで撮ったルーク・ドナルドと家族の写真、本人に会場で直接手渡そうと思っっているんです」  
そのマスターズ2015年観戦ツアーは40名を超える申し込みがあり、今年も無事に催行されるという。

全英オープンとマスターズが  
人生を変えた!

「バブル経済の終焉と同時にゴルフ産業も一気に衰退。島津もその引き波から逃れることはできなかった。そんな折、スコットランドに行く機会に恵まれる。1995年、セントアンドリュースのオールドコースで開催された全英オープンの観戦ツアーだ。」  
「最終日、1打リードでホールアウトしたジョン・デリーはR&Aのクラブハウスに引き上げたんです。曇り空の午後5時ごろでした。そのクラブハウスの先の空にふっと日が差したんです。そうしたらデリーを追いかけたコンスタンティノ・ロッカが30ヤードのチップインパディを決めてブレイクオフへ。ものすごかったですね。歓声で地面が揺れるってこういうことなんだと。ゴルフの神様の存在を感じました」  
「雷に打たれるような体験をしたころ、冒頭で触れた作家、夏坂健との邂逅も訪れた。件の文章は島津にとって生涯忘れ得ぬ命題になった。」  
「夏坂先生がたくさんの作品を通じて伝えたかったのは、ゴルフの本当の魅力でした。人生にゴルフのある幸せでした。歴史や文化に目もくれず、お金儲けばかりに利用され続けてきた日本のゴルフは、大きな反省を迫られました。我々のゴルフは、せいぜい小学生レベルだと。自分の仕事にしてもそうです。これまでは、お客様や時代に背中を押されていた

だけなんじゃないか? 全英をこの目で見てからは、世界の本物を紹介しなきゃいけない、それが自分の使命なんだと思うようになったんです」  
「自らの意志というものを島津に芽生えさせた体験はもう一つある。2000年のマスターズ。予選ラウンドの前日に行われる水曜午後の『パー3コンテスト』で、アメリカゴルフ文化の神髄ともいえるエンターテインメント性に打ちのめされたのだ。」  
「一流プレーヤーが子供や孫をキャディにしてパー3コースを回る、というイベントでね。それがほほ笑ましくてかわいくて、集まったパトロン達への究極のおもてなしなんです。これもまたゴルフの素晴らしさなんだと感動しました。以来マスターズも全英オープンも、観戦ツアーを企画しています」  
ジェットアンドスポーツの主な顧客はハイエンドシニア層だ。人生経験の豊かな人々に向けたサービスにおいて、島津は社員添乗員を必須条件に挙げた。企画を取り扱った者が最後までかかわることで最上のおもてなしができるのだという。  
「この歳になるとツアーエスコートはもう無理ですけどね。でも、現場には行きます。僕がやるのはこれ」。そう言ってカメラを手にした。クォリティーの高いツアーパンフレットを作るために自分でコース写真を撮り出してから、今ではゴルフクラブよりカメラ機材を揃える頻度が高くな